Osaka University Knowledge Archive

Title	特定妊婦のケアをめぐる助産師の実践の現象学的研究
Author(s)	生駒, 妙香
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96190
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　生駒妙香　　）	
論文題名	特定妊婦のケアをめぐる助産師の実践の現象学的研究

論文内容の要旨

本論文は、助産師による特定妊婦へのケアはいかなるものかを、現象学的な質的研究の技法を用いて、助産師個々の実践の成り立ちを記述することを主たる研究課題とした。それにより、助産師による特定妊婦へのケアを探求するとともに、子ども虐待防止への課題を探ることをめざした。

「特定妊婦」とは、児童福祉法に記された法律用語で、深刻化する子ども虐待を背景に、2008年改正児童福祉法において規定された。「出産後の養育について出産前において支援を行うことが特に必要と認められる妊婦」と定義されている。支援が必要となった特定妊婦は要保護児童対策地域協議会に登録され、多機関・多職種において連携し支援がなされている。以下、本論文の概要を記す。

まず、序章では、特定妊婦が法制化された経緯と実践者である助産師の役割について整理した。第1部第1章では、国内外の子ども虐待対応の変遷と現状を、第2章では、特定妊婦を取り巻く研究を確認した。子ども虐待防止に関連する法律は、深刻な虐待事件が起こるたびに法改正がなされる現状にある。特定妊婦の背景要因とされる「妊婦健診未受診」、「若年妊娠」、「こころの問題」等は子ども虐待との関連が示されている。これらの特定妊婦のもつ背景要因は重層化しており、社会からの「孤立」の問題が包含されていた。特定妊婦との関わりにおいて支援者は、関係構築に悩み苦慮する現状があり、特定妊婦との継続的な関係構築が喫緊の課題であることを確認した。

一方、支援者として関わる助産師は、妊娠期から出産・育児期まで継続かつ定期的に特定妊婦と関わりのある専門職であり、その役割が期待されている。そこで、助産師による特定妊婦への実践を現象学的に紐解くことによって、共有可能なものとして可視化することを試みた。

第2部は、助産師による特定妊婦への実践の調査研究である。第3章では、一回性が特徴である助産実践において、文脈に埋め込まれて成り立つ実践を描くことができる現象学的な質的研究の技法を用いる意義について述べた。第4章から6章は、6人の助産師のインタビュー分析を一人ひとり個別に記述した。章立ては助産師の活動の場により、第4章「地域助産師」、第5章「臨床助産師」、第6章「母性専門看護師」とした。6人の助産師たちの実践の土台となるテーマは、「母親と社会をつなげる支援」、「亡くなった命のことを忘れない」、「母子とその周りもみる」、「みんなで見守る」、「安心できる関係の構築」、「身体から心に届けるケア」であった。

第3部では、調査研究をもとに、特定妊婦のケアをめぐる助産師の実践の構え(第7章)と、特定妊婦のケアをめぐる助産師の役割と課題(第8章)を考察した。本研究で明らかになった助産師たちの実践の構えは、「間主観的な対人関係スタイル」であった。母親の「変化を捉える」ことや「強みをみる」といったまなざしであり、ラベリングをしない特定妊婦へのまなざしが特定妊婦とのつながりの土台となっていた。特定妊婦とつながっていく実践スキルでは、「一緒に」、「聞く」、「代弁する」、「褒める」実践が示された。さらに、助産師の特徴的な実践として、母子の身体を見ることによる「身体を介したケア」が明らかになった。助産師たちは、母親の「手」や「足」、「傷」、あかちゃんの身体の硬さといった身体からのサインを察知することにより、母子の状況を捉えていた。しかしながら、「身体を介したケア」は両義的な意味をもつことから、助産実践だけでなく助産師の関わるケア全般において常に念頭に置く必要が示唆された。

助産師が特定妊婦と「つながる」ことの意味は、母親たちの自己責任論を解除し、援助希求を後押しすることであった。これらを支えているのは、母親の「生活史を知る」ことと、母親の本音が「出てくる」といった中動態的な関わりである。そうして、母親たちにとって助産師が、すぐに相談できる存在となり得るのである。「出てくる」という実践の成り立ちには二つのベクトルがある。一つは身体からのサインを察知するといったような「かすかなSOSへのアンテナ」である。もう一つは、常に母親の味方であることを「魅せる力」である。これらによって、母親のSOSを発信する力が後押しされることが示された。

だが一方、社会から特定妊婦に対しては、母親役割規範だけでなく、そこからの逸脱という二重のまなざしが向けられている。それゆえ規範から逸れないように、「助けて」と言えない状況に陥る構造があった。したがって、本研

究で示された「間主観的な対人関係スタイル」や、実践スキルを用いた関わりこそが重要で、これらが特定妊婦との継続的な関係構築を支えていく。誰もが「助けて」と言える社会は、誰もが安心できる社会であり、支援者自身も守られていくのである。

特定妊婦のすぐには解決できない課題へは、「ネガティブ・ケイパビリティ」という留保する力を助産師は発揮する必要がある。また「ただ聞くこと」が心理的援助となり、それによって特定妊婦とつながっていけるが、これにも「ネガティブ・ケイパビリティ」の力が必要といえる。本研究の助産師たちは、「ネガティブ・ケイパビリティ」を発揮しつつ、母親たちのポジティブな未来を想像し、助産師のケアが届く範囲を見極めながら、関係職種との役割分担や連携を行っていた。

終章では、子ども虐待防止と助産師教育への示唆を述べた。子ども虐待とは、本来であれば届けられるべき支援が届かないがゆえに起こり、社会から孤立した状態と言い換えられる。それゆえ虐待対応においては、親の有責性の視点ではなく、「孤立」の視点からの支援が不可欠であると考える。さらに、本研究での知見は助産師教育に置き換え活用できる。つまり、学生一人ひとりの経験を尊重した教育実践である。

本論文で示されたのは、助産師たちが自己を媒介として特定妊婦とつながり、母子や家族、地域社会とのつながりを支え、特定妊婦が社会の「誰か」とつながることによって、母子を孤立から守る実践であった。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　生　駒　妙　香　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	村上　靖彦
	副 査　教授	白川　千尋
	副 査　学外委員	大平　光子（周南公立大学人間健康科学部看護学科設置準備室長／教授）

論文審査の結果の要旨

生駒氏の論文「特定妊婦のケアをめぐる助産師の実践の現象学的研究」では、特定妊婦と呼ばれる若年や精神疾患などで育児に困難が予想される母親をサポートする助産師たちの実践を主題として、６人の助産師（うち2人は母性専門看護師）の詳細なインタビュー分析を軸にしている。

全体は170ページの大部の論文だが、まず第1部の60ページで詳細に周産期における助産的な支援および、困窮した妊産婦への心理的社会的支援、乳児の虐待を巡る日本の状況について、助産学だけでなく、心理学、社会福祉学や社会学までの文献、ルポ、そして日本のみならずアメリカ・イギリスを始めとした海外数カ国の妊婦への支援状況のサーベイを行っており、全体としても浩瀚な先行研究のレビューとなっている。

第２部では６人の助産師・母性専門看護師のインタビューについて現象学的な質的研究の技法を用いた詳細な分析を行っている。AさんBさんが、地域において妊娠期、および出産後の母親支援をおこない、Cさん、Dさん、Eさんが病院においてとくに周産期の支援を行い、地域の資源へと繋ぐ役割をにない、Fさんは大学教員として学生を育てながら病院で母親を支援する立場にある。つまり、妊娠出産育児に関わる助産師の業務について、広く網羅的な領域をカバーするとともにSOSを明確に出すわけではなく、今までの経験ゆえに医療者を信頼しているわけでもない妊産婦たちをどうささえるかについて繊細な配慮が語られ、分析されていく。

例えばAさんは育児に困難・心配を抱えている母親のための育児サークルをつくり「ちょっと」家で一人になったら「ちょっと」一日大変（６５ページ）というような、「ちょっと」といった細かい言葉遣いの機微を捕まえながらピアグループによる育児の「ハードル」を下げる支援について分析していく。

Bさんは、亡くなった３人の乳児のことを思い出しつつ、脆い命と困難を抱える母親と「同じぐらいの目線で『一緒に考えさしてほしい』」と同じ目線で育児を考えていくことで支えていく（７６ページ）。

Cさんについては「「今、来てくれてる」目の前の母子だけではなく、「その周りもしっかりとみたい」と語る。「その周り」とは、今、目の前にはいない、きょうだいや夫、祖父母である。目」と描写し、家族の広がり、そして過去と未来の接続からケアを考える。

Fさんにおいては、身体ケアは丁寧にできているものの愛着が形成できずに特定妊婦とされた母親が、身体ケアは丁寧にできているものの、かかわりがうまくいかず支援が途切れてしまったというケースから、サポートの難しさと反省についておおくのページが割かれる。そのなかで複数の支援者の目で見るチームでの見守りの重要性に思い至ることになる。

CNSのDさんは、他部署との連携の重要性とコーディネートについて多くを語った。そのなかで母親から「教えてもらう」という一見逆転した関係のなかでケアを成り立たせている。

このように個別の実践を掘り下げることは、特定妊婦のケア一般についての普遍的な描写ではない、と考えられそうだ。しかしとりわけ特定妊婦はそれぞれ固有の家族構成、家族の困難、貧困や差別などの社会的困難をかかえており、そのなかでのケアはおのずとマニュアル化、標準化にはそぐわないものである。本論のように、個別の実践についての細かい積み重ねの記述を通してのみ、必要な気遣いや技術についてのモデルを提供可能である。その点で、本論のような一人ひとりの助産師の実践にフォーカスし、かつナラティブを詳細に分析した結果は非常に有意義であり、またすでに学会誌の査読論文も複数掲載されており、博士（人間科学）にふさわしいと判断できる。